

## 第5章 儀礼文献に記される神々に関する記述の分析

海藩出在丙午歳	海藩は丙午年に生まれる。
八月十五正午中	八月十五日の真昼に生まれる。
身着紅衣掛金甲	紅色の衣を着て金の鎧を着る。
脚踏火磚任任紅	脚は赤い火磚を踏む。
手拿犁頭度三度	手に犁先を持って三度を受け、
法教流傳四海通	法教が広く伝われ、四海まで知られる。
口咬犁頭紅東東 <sup>23</sup>	口に真っ赤な犁先を噛む。
衆官擁護在壇中	祭壇におり、官たちに擁護される。
無法之人真怕死	法ができない人は本当に死ぬことを恐れる。
有法之人心里容	法ができる人は心が広い。

海藩を描写している記述の「海藩出在丙午歳」「八月十五正午中」「身着紅衣掛金甲」から、海藩は丙午年8月15日昼に生まれ、紅地金色の鎧を着ていることが読み取れる。

注目したいのは、「脚踏火磚任任紅」「手拿犁頭度三度」「法教流傳四海通」「口咬犁頭紅東東」などの字句である。ここから見た、脚で火磚を踏み、手で犁先を持ち、口で真っ赤な犁先を噛むことは、全て祭司になるために受ける試練であり、「三度」という言葉は3回の試練を受けることを示していると考え。特に、手で犁先を持つということは、現在湖南省永州市藍山県の過山系ヤオ族(ミエン)が伝承している度戒儀礼の中の「捧火磚(捧火石)」という儀礼に見られる。実際の「捧火磚(捧火石)」儀礼において、受礼者たちは熱く熱した犁先をと石を取って手の上で転がし捧げる試練を受ける。この記述に記されることは、正に過山系ヤオ族(ミエン)の伝承している度戒儀礼中の試練を受ける内容の一部を示しているといえる。度戒儀礼の中で受けれる試練として、その他には、刀の山を越え、棘の床を渡ることも見られる。しかし、大海藩神画からよく見られるのは、刀の梯子を登る場面のみであり、赤い三角形の犁先を噛み、手で犁先を持ち、火磚を踏むなどのことが描かれるのはめったにない。

海藩に関する記述から、海藩は脚で火磚を踏み、手で犁先を持ち、口で真っ赤な犁先を噛む能力を持ち、法術が優れている神であると読み取れる。

その次に、太尉の記述となる。

太尉出在戊寅歳	太尉は戊寅年に生まれる。
十二月十五是寅時	十二月十五日寅時に生まれる。
身着紅衣騎白馬	紅衣を着て白馬に乗る。
度法醮壇為祖師	祖師として法を伝度する祭壇にいる。

文中の「太尉出在戊寅歳」「十二月十五是寅時」「身着紅衣騎白馬」の字句から、太尉は戊寅年12月15日寅の刻(3-5時)に生まれ、紅色の衣を着、白馬に乗ることが分かる。ここから見た衣の色と白馬に乗る特徴は、太尉神画に描かれる内容と一致している。また「度法醮壇為祖師」

## 第5章 儀礼文献に記される神々に関する記述の分析

から、太尉は祭壇において法を伝授する祖師であると読み取れる。

その次に、十殿のことが記述されている。

十殿冥王街 <sup>24</sup> 前坐	十殿冥王は官庁の前に座る。
攔街赦罪己多強	官庁に止めて罪を赦免する。
生時也過死也過	生まれる時も死ぬ時も通過する。
陰落手下定陰陽	あの世に落ちて陰陽を定める。

文中の「攔街赦罪己多強」「陰落手下定陰陽」という字句から、十殿は罪を赦免し、陰陽を定める性格が強く現れている。また「生時也過死也過」から、生まれる時も死ぬ時も必ず十殿冥王の前に通るという生死に対する考え方が見られる。

衆聖出在混沌歳	諸々の神は混沌の年に生まれ、
化身上好神仙	世の中の良い神々になる。

ここの「衆聖出在混沌歳」とは、これまで記述された元始天尊、靈寶天尊、道德天尊、玉皇、聖主、天府、地府、陽間、水府、張天師、李天師、鄧元帥、馬元帥、關元帥、大海旛、十殿は混沌から生まれたことが分かる。

その次に、老君（太上老君）について記述されている。

老君出在青雲内	老君は青色の雲の内に生まれる。
天下匠人畫得成	世の中の匠は（老君の）容貌を描くことができる。
三清殿上巍巍坐	三清殿に高くそびえるように座り、
正是匠人畫得灵	正に手先が器用である匠の描いた通りである。
匠人畫出龍衣像	匠は龍衣を着る姿を描く。
衆官降下聖真容	諸々の神は降臨して本当の容貌を現す。
洪武年間降世出	洪武年間に生まれ、
正月十五是寅時	一月十五日寅時であった。
一身便帶毫光鏡	鏡を持ち全身に毫光を放つ。
為車天上照凡間	車に乗って天におり、世の中を照らす。

文中の「老君出在青雲内」「洪武年間降世出」「正月十五是寅時」「一身便帶毫光鏡」という字句から、太上老君は洪武年1月15日寅の刻（3-5時）青色の雲から生まれ、鏡を持っているとある。「天下匠人畫得成」「正是匠人畫得灵」「匠人畫出龍衣像」などの字句から、老君は絵師によって龍の模様の衣を着る姿として描かれると読み取れる。太上老君は、別名道德天尊ともいう。道教の始祖とみなされる老子が神格化されたもので、道教の三清の一であるとされる。文中の「三

## 第5章 儀礼文献に記される神々に関する記述の分析

「清殿上巍巍坐」とは、太上老君は三清殿に座することを示し、正に三清の一であることを示していると考えられる。

家主有心来敬奉	家主は謹んで信仰すると考える。
保安家主進金銀	家主の安全を保つために金と銀を差し出す。
敬奉灵神神護佑	霊神を謹んで信仰し、神々の加護を頂く。
進金進寶進人丁	金や宝は（家に）入り、人口が増える。

ここの「敬奉灵神神護佑」「進金進寶進人丁」などの字句から、以上で記述された神々を謹んで奉ずるならば、その加護を頂くことができ、財産や人口などが増えるようになるという祈願が見られる。

その次に、「混沌歌」の最後の部分になる。

教堂 <sup>25</sup> 裏内千般聖	祭場の内に様々な神がおり、
教堂度賀衆灵神	祭場で諸々の神（の降臨）を祝う。
千年難逢灵神到	霊神が降臨するのは、めったに会えないのである。
萬年難逢灵神筵	霊神が集まることもめったに会えないのである。
龍華會上好耍笑	龍華会に集まっておどけ話をする。
開言一句賀灵神	話を始めると、霊神に一言祝をいう。
聞説今朝有相請	現在招請を聞くなら、
衆官座位一斉臨	諸々の神は同時に来臨せよ

この部分の「教堂裏内千般聖」「千年難逢灵神到」「聞説今朝有相請」「衆官座位一斉臨」とは、諸々の神が一緒に祭壇に降臨したということである。

以上では、「混沌歌」に記される内容を分析してきた。内容から神画に描かれる元始天尊、靈寶天尊、道德天尊、玉皇、聖主、天府、地府、陽間、水府、張天師、李天師、鄧元帥、馬元帥、關元帥、大海旛などの神々の生年月日、誕生時刻、冠物、持物、衣服の色、乗物などの情報を読み取ることができた。記述から見たこれらの神々の冠物、衣服の色、持物、乗物などに関しては、神画に描かれる部分と多少の差異が見られるが、殆ど一致していることが判明した。さらに、神々の生年月日と誕生時刻も分かり、神画に描かれる神々に関する情報を一層知るようになってきた。

また、「混沌歌」の内容により、ヤオ族が考えている神の世界は、混沌から、高皇や唐皇などの創世神の誕生・天地の開闢・衣や火や日月などの創造・神々の誕生というプロセスで形成されていることが見える。記述に記される、混沌の時に生まれた、元始天尊、靈寶天尊、道德天尊、玉皇、聖主、天府、地府、陽間、水府、張天師、李天師、鄧元帥、馬元帥、關元帥、大海旛、十殿は、ヤオ族のパンテオンであると言えよう。これらの神々は全て儀礼神画に描かれている。よ



って、儀礼神画は、ヤオ族のパンテオンを絵画的に表現したものであると言える。

### 第2項 三清神（元始天尊・靈寶天尊・道德天尊）に関する記述

#### ◆ 請聖書の冒頭部分に配置された三清神に関する記述<sup>26</sup>

請聖書のはじめに、天地が分かれたことによって生成したとされる字句が記されている。その内容を次のように記述している。

太極分高厚、謹請上属天、人民修正道、壇内作真仙、行満三千界、時登四萬年、  
當台開宝殿、金口永流伝、人生須未老、壇内焼炉香

〈訳〉

太極は分れて高く（天）厚く（地）、謹んで上天に属さんことを請う。

人民は正しい道を修め、壇の内に真仙となる。

行は三千界に満ち、時に四万年に登る。

当台に宝殿を開き、金口は永遠に流伝する。

人生は須らく未だ老いず、壇内に一炉の香を焼く。

文中の「太極分高厚」とは、陰陽が分れて天が高くなって地が厚くなるということである。「人民修正道（人民は正しい道を修め）」、「壇内作真仙（壇の内に真仙となる）」、「行満三千界（行は三千界に満ち）」、「時登四萬年（時に四万年に登る）」、「金口永流伝（金口は永遠に流伝する）」などの字句は、人々は正しい道を修めるようにと忠告して戒めている。正しい道を修めるならば、真の神になり、修業は大成し、世に盛名を永久に残すとされる。このようなプロローグ的記述は、ほとんどの請聖書先頭部分に置かれている。この記述の次に、三清の元始天尊、靈寶天尊、道德天尊をはじめ、様々な神が登場してくる。

まず、元始天尊の記述を確認したい。

皈依天、正法教、神馬通、妙想慈悲十劫内、天星正法得威勇、回照下壇宮、  
金宝相、青雲化、化巍々、照見四邊感大道、閻浮世界度人民、天下滅邪精、  
聞照請、元始天尊降来臨、火急甲、速来臨

〈訳〉

天に帰依し、法教を正す。神馬が通じ、妙なる想ひ慈悲は十劫の内に（行き渡る）。天星の正法は威勇なるのを得て、下壇宮を回照す。

金宝の容貌で、青雲が化し、高大な様に化し、四辺を照見して大道を感じしめ、閻浮世界に人民を度（すく）う。天下に邪精を滅す。

招請を聞けば、元始天尊は来臨する。火急的に速やかに来臨する。



この記述は、元始天尊についての説明である。文中の「金宝相（金宝の容貌）」は、神を褒める言葉である。「天星正法得威勇（天星の正法は威勇なるを得る）」、「閻浮世界度人民（閻浮世界に人民をすくう）」、「天下滅邪精（天下に邪精を滅す）」などの字句は、邪鬼・邪精を滅ぼす者という性格が強く現れている。次に靈寶天尊に関する記述が続く。

皈依法、青雲化、化巍巍、變化三千感大道、度人無數變河沙、宝上坐蓮花、  
樓台内、高萬丈、金來装身着仙衣、數白領坐天宮内、下照萬方管人民、  
天下滅邪精、聞召請、靈寶天尊降齊臨、火急甲、速來臨

〈訳〉

法に皈依し、青雲が化し、高大な様に化す。三千に変化して大道を感じ、人を済度すること無数にして、河の沙を変ずるようなもの、宝の上に蓮花に座る。

樓台の内に（あり）高さは萬丈、金によって身を装い、仙衣を着ること数百領、天宮内に坐り、下は萬方を照らして人民を管理する。

天下に邪精を滅し、招請を聞けば、靈寶天尊は降臨する。火急的に速やかに來臨する。

この記述は、靈寶天尊が「蓮花（蓮華）」に座り、「仙衣（仙人の衣）」を着、萬丈ある高い「天宮（天の宮殿）」にいる様子を描写している。また、「下照萬方管人民（下は萬方を照らして人民を管理する）」とあるが、これは靈寶天尊の位が高いことを象徴し、さらに民を統治する統率者として存在することである。靈寶天尊に関する記述でも、元始天尊と同様の形容が使われており、「天下滅邪精（天下に邪精を滅し）」という邪精を滅ぼすという性格は共通している。

次に道德天尊に関する呪文が続く。

皈依師、感道德、天也尊、老母懷胎八十春、九龍運水洗陽間、頭髮白如銀、  
道高龍俯付、真有道天仙、知善知凶真御領、玉皇案上共同心、斬鬼滅邪精、  
聞召請、道德天尊降來臨

〈訳〉

師に皈依し、道德に感ず。天もまた尊し。老婆懷胎すること八十春、九龍は水を運び陽間を洗う。髪の毛は白く銀の如し。

道は高く龍が付きて俯く、真の有道の天仙である。善を知り凶を知って真の統領、玉皇案上に心を共に同じくし、鬼を斬り邪精を滅す。

招請を聞けば、道德天尊は來臨する。

道德天尊は老子が神格化された神で、文中の「老母懷胎八十春」というのは、老子が80歳の母親から誕生したという伝承を踏まえていると松本浩二という[松本 2011:25]。「頭髮白如銀（髪の毛は白く銀の如し）」という句は、道德天尊の容貌を描写している。儀礼神画に描かれている

道德天尊も正にこの記述のように、髪・眉・髭が真っ白な老人像である。このことから、文献記述と神画に描かれている道德天尊の特徴が一致していることは明白である。また文中の「知善知凶真御領（善を知り凶を知って真の統領）」、「天下滅邪精（天下に邪精を滅し）」などの句から、道德天尊の統率者と邪精を滅ぼす者という性格が現れている。

さらに異なる『請聖書』に収められる三清に関する歌を取り上げる。

「接大三清歌」<sup>27</sup>

香煙裡内是壇前	大道 <sup>28</sup> 元来降醮筵
大道原来龍虎伏	南曹北斗在神仙
一個在前個在後	踏上州門入旧天
三清出在青雲殿	原在紫雲化出身
紫雲画身生白■	世今壇内得安身
頭帶金冠脚踏地	手拿大扇立胸前
聞說今朝有状請	元始天尊齊下壇
元始天尊為第一	靈寶天尊第二名
道德天尊第三教	老君殿上好排兵
日裡又發千兵去	夜裡又發萬兵行
同来又叫高宮聖	斬鬼除邪界玉皇
頭帶金冠脚踏地	手拿牙簡立胸前
聞說今朝有状請	太上老君齊下壇

〈訳〉

香煙の中、祭壇の前である。大道は醮筵に來臨する。

大道は本来龍と虎が伏す。南曹北斗の仙人もいる。

一人は前で一人は後ろに、州門に踏み上がって九天に入る。

三清は青雲殿の出身である。本来紫雲から身を化す、

紫雲から身を化して白い■を生ず。現在祭壇の内に身を寄せている。

頭に金冠を被って脚は地を踏む。手に大きな扇子を縦に持って胸の前に置く。

現在招請を聞き、元始天尊たちは一緒に祭壇に來臨する。

元始天尊第一と為す。靈寶天尊は第二である。

道德天尊は第三教である。老君は殿上で好く兵隊を排列できる。

昼頃に千の兵隊を出兵させ、夜に又萬の兵隊を出兵させる。

一緒に来て又高宮聖を呼ぶ。斬鬼除邪界の玉皇は、

頭に金冠を被って脚は地を踏む。手に牙簡（圭）を縦に持って胸の前に置く。

現在招請を聞けば、太上老君も一緒に祭壇に來臨せよ。

この記述は、三清が青色の瑞雲から現れ、順番に天から降りてくる様子を描写している。「頭帯金冠（頭に金冠を被る）」、「手拿大扇立胸前（手に大きな扇子を縦に持って胸の前に置く）」という記述は、三清神画に描かれている道德天尊の姿と一致している。文中の「元始天尊為第一」「靈寶天尊第二名」「道德天尊第三教」の字句は、この三柱の神の位の高低を示していると考えられる。三清神の他に、太上老君と玉皇も見られる。「老君殿上好排兵（老君は殿上で好く兵隊を排列できる）」、「日裡又発千兵去（昼頃に千の兵隊を出兵させる）」、「夜裡又発萬兵行（夜に又萬の兵隊を出兵させる）」などは、太上老君は兵隊を使役する者という性格を強く現しており、「斬鬼除邪界玉皇（斬鬼除邪界の玉皇）」は、玉皇の邪鬼を滅す者という性格を現している。

### 第3項 玉皇に関する記述

『請聖書』の中にある玉皇に関する記述は、「玉皇歌」のような独立している歌があるが、「請大堂兵歌」の一部として記述される場合もある。「請大堂兵歌」には、様々な神を描写しており、本項では、玉皇を描写する部分のみ抽出して紹介する。まず、「玉皇歌」を見て行きたい。

#### 「玉皇歌」<sup>29</sup>

玉皇星主大王天	大道原来降醮筵
十七十八郎帰位	二十道德我帰天
高上玉皇郎大帝	含毛頭戴紫金冠
玉皇頭戴平天帽	両辺帽戴 <sup>30</sup> 一般齊
大道原来龍虎伏	龍蛇虎伏蓋郎兵
日裡又発千兵去	夜裡又発萬兵行
抽頭望見高宮聖	邪師送出鬼邪神
頭戴平天脚踏地	手拿牙簡立胸前
聞説今朝有状請	推車放攬降香壇

〈訳〉

玉皇星主は大王天である。玉皇は本来醮筵に來臨する。

十七十八歳で神の位に帰す。二十歳に道德天尊が我を天に帰す。

高上玉皇郎大帝は、頭に紫金冠を被る。

玉皇は頭に平天帽を被る。帽子の両側の紐の長さは同じである。

本来大道になれば龍と虎が伏す。龍・蛇・虎が伏して郎の兵隊を圧倒する。

昼に千の兵隊を出兵させ、夜に又萬の兵隊を出兵させる。

振り返ると高宮聖を眺められる。邪師は鬼や邪神を送り出す。

頭に平天帽を被り、脚は地を踏む。手に牙簡（圭）を縦に持って胸の前に置く。

現在招聘を聞けば、車を推して繩を置き、祭壇に來臨する。



「玉皇歌」の、「玉皇星主大王天（玉皇星主は大王天である）」「十七十八郎歸位（十七十八歳で神の位に歸す）」「二十道德我歸天（二十歳に道德天尊が我を天に歸す）」などの字句は、玉皇星主は天の王であり、十七十八歳に神になり、二十歳になったら、天に歸されると解釈する。玉皇と星主はもともと異なる神である。しかし、筆者は現地で神画の調査を行う際に、何点かの玉皇神画の裏に「玉皇星主」の文字が書かれていることを確認している。また一部の祭司は玉皇神画を「玉皇星主」と呼ぶ場合もある。よって「玉皇歌」の冒頭に出てきた「玉皇星主」とは、二柱の神のことではなく、玉皇のみ指していると考ええる。

また「玉皇頭戴平天帽（玉皇は頭に平天帽を被る）」「両辺帽帶一般齊（帽子の両側の紐の長さは同じである）」「手手拿牙簡立胸前（手に圭を縦に持って胸の前に置く）」という字句は、玉皇の姿を描写している。また、「日裡又發千兵去（昼頃に千の兵隊を出兵させる）」「夜裡又發萬兵行（夜に又萬の兵隊を出兵させる）」は、玉皇の兵隊を使役する性格を現していると考ええる。

さらに「請大堂兵歌」に記される玉皇の記述を取り上げる。

「請大堂兵歌」に記された玉皇に関する記述<sup>31</sup>

玉皇星主大王天	大道原来降醮筵
十七十八郎歸位	二十德道我歸天
頭戴平天脚踏地	手拿牙簡案脳前
聞説今朝有相請	推車放攬降香壇

<訳>

玉皇星主は大王天である。玉皇は本来醮筵に降りて来臨する。

十七十八歳に神位に歸す。二十歳に道を得て、我は天に歸す。

頭に平天帽を被り、脚は地を踏み、手に圭を持っている。

現在招請を聞けば、車を押して縄を置き、祭壇に來臨する。

「請大堂兵歌」は、「玉皇歌」の前後の二行を切り取ってできたものである。記された内容は同じであり、ここでは詳述しない。

また、玉皇に関する記述は「請大堂兵歌」に記されていることから、過山系ヤオ族(ミエン)の神々の中で、玉皇は「大堂兵」として位置づけられていると考ええる。「大堂兵」は、位が高いであろう。よって、玉皇は神であるばかりでなく、位の高い兵とする性格も見える。

#### 第4項 聖主に関する記述

本項では、『請聖書』に収められる、聖主に関する記述を紹介する。これは玉皇の記述と同様で、独立している歌があり、また「請大堂兵歌」の一部分として記されている場合もある。いずれも同様な内容であるため、一緒に見て行きたい。

「聖主歌」<sup>32</sup>

聖主出在青雲内 北斗叫郎做天尊  
你為上清為功德 聖主修来十洞田  
頭戴平天脚踏地 手拿牙簡立胸前  
聞說今朝有狀請 聖主推車降香壇

〈訳〉

聖主は青雲の内から現れる。北斗神は聖主に天尊を遣わす。  
聖主は功德のため上清と為す。聖主は十洞田を修来する。  
頭に平天帽を被り、脚は地を踏む。手に圭を縦に持って胸の前に置く。  
現在招請を聞けば、聖主は車を推して祭壇に來臨する。

さらに「請大堂兵歌」に記される聖主の記述を取り上げる。

「請大堂兵歌」に記された聖主に関する記述<sup>33</sup>

星主出世青雲内 北斗叫郎做天尊  
你為天尊為功德 星主修来十重天  
頭載平天金魁帽 手拿牙簡案脳前  
聞說今朝有相請 推車放攬降香壇

〈訳〉

星主は青雲の内から生まれた。北斗神は星主に天尊を遣わす。  
星主は功德のため天尊と為す。星主は十重天を修来する。  
頭に平天金魁帽を被り、手に圭を持っている。  
現在招請を聞けば、車を推し繩を置き、祭壇に來臨する。

聖主はまた星主とも呼ばれる。中国語の中で、「聖 (shèng)」と「星 (xīng)」の発音は似ており、筆者は調査の際に、一部の過山系ヤオ族(ミエン)の祭司が「聖主」と「星主」を混同して使うことを確認している。よってこの「星主」と「聖主」は同じ神であると考ええる。「星主」という呼称は、星の神を意味するのであろう。また、記述から、聖主(星主)は天尊であり、位が高い神であることが分かる。

以上の二つの記述には、聖主(星主)は青色の瑞雲から現れ、頭に冕を被り、手に圭を持ち、車に乗って祭壇に降臨する様子を描写している。この描写は神画に描かれている聖主の服装などと一致する。

前項で述べた玉皇と同じように、過山系ヤオ族(ミエン)の神々の中では、聖主も「大堂兵」として位置づけられていると考える。

第5項 天師（張天師・李天師）に関する記述

天師に関する記述には、張天師と李天師の他に、様々な神が見られる。以下に、「張天師」と「請大堂兵歌」に記されている天師の部分について述べる。

「張天師」<sup>34</sup>

上元学法張天師	中元学法李天師
三个天師去学法	天師学法好宮星
當初学法張趙二	世今学法尽帰依
只有凡人不信法	法在陽州弟子壇
張趙二郎去請鼓	塞断八郎去請鑼
雲山十郎請刀劍	請得刀劍請法師
楊山十九去請角	閭山七郎去請兵
才禄二庫身着緑	六印判官身着紅
叫作天蓬都元帥	押過天遊副將軍
頭戴金冠脚踏地	手拿牙簡立胸前
上元学法張天子	随娘去嫁李家兒
聞説今朝有状請	張天任々降香壇

〈訳〉

上元の法を学ぶ張天師、中元の法を学ぶ李天師。

三人の天師は法を学びに行き、天師は法を学ぶ好い宮星である。

当初、法を学ぶ張趙二は、現在も法を学んで既に帰依している。

凡人だけは法を信じない。法は陽州の弟子壇にある。

張趙二郎は太鼓を請いに行く。塞断八郎は鑼を請いに行く。

雲山十郎は刀と劍を請いに行く。刀と劍を請うことができ法師を請う。

楊山十九は角を請いに行く。閭山七郎は兵隊を請いに行く。

財禄二庫の神様は緑色の衣を着る。六印判官は紅色の衣を着る。

名前は天蓬都元帥と呼ばれる。護送して天遊副將軍は過ぎる。

頭に金冠を被って脚は地を踏む。手に圭を縦に持って胸の前に置く。

上元の法を学ぶ張天子、母親のあとにつき従って李家の息子に嫁いで行く。

現在招請を聞けば、張天師は（任々の意味は不明）祭壇に來臨する。

「張天師」という題名を付けているが、内容からは李天師及びその他の神々の神名も見られる。はじめに記されているのは、「上元学法張天師（上元の法を学ぶ張天師）」「中元学法李天師（中元の法を学ぶ李天師）」という字句であり、張天師は上元の法を学び、李天師は中元の法を学ぶ様子が描写されている。天師に法を学ばせるために、張趙二郎などの神々が様々な法具を請いに



行く様子も描写している。張趙二郎は太鼓を請いに行き（張趙二郎去請鼓）、塞断八郎は鑼を請いに行く（塞断八郎去請鑼）。雲山十郎は刀と剣を請いに行き（雲山十郎請刀劍）、刀と剣を請うことができ後に法師を請う（請得刀劍請法師）。楊山十九は角を請いに行き（楊山十九去請角）、閻山七郎は兵を請いに行く（閻山七郎去請兵）。またこれらの神々の後に、緑色の衣を着る財禄二庫、紅色の衣を着る六印判官、天蓬都元帥、遊副將軍という名前の神々も見られる。記述の最後に、天師は頭に金冠を被って脚は地を踏み（頭戴金冠脚踏地）、手に圭を縦に持って胸の前に置く（手拿牙簡立胸前）という姿を描写している。これは神画に描かれている天師の様子と一致している。

さらに「請大堂兵歌」に記される天師の記述を取り上げる。

「請大堂兵歌」に記された天師に関する記述<sup>35</sup>

上元学法張趙二	中元学法李天師
三個天師去学法	天師学法好容身
上界之人無世界	下界中元伏鬼神
聞說今朝有相請	天師臨々降香壇
龍虎面前張家子	龍虎壇内正学師
小師法水尋鬼劍	身着紫微龍鳳衣
四天大王玄請角	七路八郎去請羅
閻山十二請刀劍	請得刀劍請法壇
張趙二郎去請角	閻山九郎去請兵
財源判官身着祿	祿縁判官身着青
叫着天蓬都元帥	合着天■副將軍
若有邪師来闕法	十分有法闕閑心
聞說今朝有相請	天師焰々下壇前

〈訳〉

上元の法を学ぶ張趙二、中元の法を学ぶ李天師。

三人の天師は法を学びに行き、天師は法を学び、身をよく寄せられる<sup>36</sup>。

上界の人は世界がない。下界の中元は鬼神を伏す。

現在招請を聞けば、天師は（臨臨の意味は不明）祭壇に來臨する。

龍虎の目の前にいる張家の息子、龍虎壇内で師から法を学んでいるところである。

小師は法水で鬼劍を尋ねる、身に紫微龍鳳模様の衣を着る。

四天大主角を請いに行く。七路八郎は羅を請いに行く。

閻山李十二は刀劍を請いに行く。刀劍を請うことができ、法壇を請う。

張趙二郎は角を請いに行く。閻山九郎は兵隊を請いに行く。

財源判官は身に緑の衣を着る。祿縁判官は身に青の衣を着る。

天蓬都元帥を呼び、■副將軍に合う。

もしも邪師が法と戦いに来たら、十分余裕を持って法と戦う。

現在招請を聞けば、天師は祭壇の前に来臨する。

「請大堂兵歌」と前頁で紹介した「張天師」と比較してみると、大まかな内容は同じである。二つの記述のはじめの部分には、上元と中元それぞれに張天師と李天師を相互対応させていることが見られる。また、二つの記述とも「三個天師去学法（三人の天師は法を学びに行く）」に言及したが、実際には二人の天師しか記述されていない。「請大堂兵歌」には、「若有邪師来闘法（もしも邪師が法と戦いに来たら）」「十分有法闘閑心（十分余裕を持って法と戦う）」の字句から、天師は法術のレベルが高い神として表現されていることが分かるが、「張天師」にはこのような字句が記されていない。また、前項で述べた玉皇、聖主と同じように、過山系ヤオ族(ミエン)の神々の中では、天師も「大堂兵」として位置づけられていると考えられる。

#### 第6項 四府（天府・地府・水府・陽間）に関する記述

四府は、天府、地府、水府、陽間の四神のことを指す。以下に紹介する「接四府」と「天府出世」・「地府出世」・「水府出世」・「陽間出世」には、この四神のことを述べている。まず、「接四府」を見て行きたい。

##### 「接四府」<sup>37</sup>

天府出世桂林縣	眼睛眉々不知天
道處買賣在道葉	一枝一秀一枝泉
聞說今朝有相請	打開天府降香壇

<訳>

天府は桂林縣で生まれ、目が凛々しく天を知らない。

道葉での商売は（意味不明）。

現在招請を聞けば、天府を開いて祭壇に来臨する。

地府出世廣州府	踏上任々求大官
百姓耕田門下請	劉車放馬問枝泉
聞說今朝有相請	打開地府降香壇

<訳>

地府は広州府で生まれ、立身出世し大官を求める。

百姓は田を耕して門下で請う。車を残して馬を放置して根源を問う。

現在招請を聞けば、地府を開いて祭壇に来臨する。

水府出世沙州府	踏上任々求大官
上水有條扒海棍	下海廣州大海忙
大海荒荒不見面	小海荒荒不見身
撐舡過海立官帝	無舡過海問根源
聞說今朝有相請	打開水浪出扶龍

<訳>

水府は沙州府で生まれ、立身出世し大官を求める。

川の上流に一本の扒海棍があり、下流広州の海は大きくて広い。

大きな海は広くて見えず、小さい海も広くて見えない。

船に乗って海を渡って官邸を築き上げる。海を渡る船がなくて根源を問う。

現在招請を聞けば、波を開いて龍に乗って出かける。

陽間出世吳州府	踏上任々求大官
踏上州門州也過	香壇鑼鼓鬧喧々
聞說今朝有相請	打開陽界降香壇

<訳>

陽間は吳州府で生まれ、立身出世し大官を求める。

州門を踏み上がって州も過ぎ、祭壇の鑼鼓を大きな音で鳴らしている。

現在招請を聞けば、陽界を開いて祭壇に來臨する。

記述は、天府、地府、水府、陽間の四神の順に、各々の神の出身地などについて段落に分けて記されている。各段落のはじめに「天府出世桂林縣」「地府出世廣州府」「水府出世沙州府」「陽間出世吳州府」の字句が置かれ、天府は桂林県で生まれ、地府は広州府で生まれ、水府は沙州府で生まれ、陽間は吳州府で生まれたとする。

天府の段落において、出身地の後に、「眼睛眉々不知天（眼が凛々しく天を知らない）」の字句がある。これは、天府の目元の凛々しい様子を描写しているのであろう。またその後の「道處買賣在道葉（道葉での売買は…）」という字句は、意味ははっきりと分らないが、天府の職業に関する性格が見える。水府の段落においては、「下海廣州大海忙（下流広州の海は大きくて広い）」「大海荒荒不見面（大きな海は広くて見えない）」「小海荒荒不見身（小さい海も広くて見えない）」「撐舡過海立官帝（船に乗って海を渡って官邸を築き上げる）」「無舡過海問根源（海を渡る船がなくて根源を問う）」「打開水浪出扶龍（波を開いて龍に乗って出かける）」などの字句から、水府は海との関わりがある水神だと考えられる。地府と陽間については、特に目立つ特徴はなかった。

さらに「天府出世」・「地府出世」・「水府出世」・「陽間出世」の記述を取り上げる。



「天府出世」・「地府出世」・「水府出世」・「陽間出世」<sup>38</sup>

「天府出世」

天府出世貴林縣	一枝二看不知天
道州買賣便第一	式曹二受一枝尊
聞說今朝友狀請	發開天府降香壇

<訳>

天府は貴林縣で生まれ、(意味不明)天を知らない。

道州での商売は第一位である。(意味不明)

現在招請を聞けば、天府を開いて祭壇に來臨する。

「地府出世」

地府出世廣州府	傳得人民置得官
百姓耕田人下住	留車■馬問根源
聞說今朝友狀請	發開地府降香壇

<訳>

地府は廣州府で生まれ、百姓に伝えることができ、官を置くことができる。

百姓は田を耕して人の下に住む。車を残して馬を■根源を問う。

現在招請を聞けば、地府を開いて祭壇に來臨する。

「水府出世」

水府出世廣州府	傳得人民置得官
上村有个八樂洞	下在廣東大海門
大海忙々不見岸	小海忙々不見天
撐舡過海立官廳	撐舡過海問根源々
聞說今朝有狀請	發開水府降香壇

<訳>

水府は廣州府で生まれ、百姓に伝えることができ、官を置くことができる。

村の入り口に一つの八樂洞がある。村はずれは廣東大海門にある。

大きい海は広くて岸が見えない。小さい海は広くて天が見えない。

船に乗り、海を渡って官庁を立つ。船に乗り、海を渡って根源を問う。

現在招請を聞けば、水府を發開して祭壇に來臨する。

「陽間出世」

陽間出世為州府	踏上宜々求大官
上村也過西也過	香壇鑼鼓鬧喧々
香村鑼鼓喧々鬧	發開陽間降香壇

聞説今朝有状請 陽間住々一斉臨

<訳>

陽間は為州府で生まれ、立身出世し大官を求める。

村の入り口も通り、西にも通る。祭壇の鑼鼓を大きな音で鳴らしている。

祭壇の鑼鼓を大きな音で鳴らしているので、陽間を開いて祭壇に來臨する。

現在招請を聞けば、陽間たちは一緒に來臨する。

前頁の「接四府」と対応して見ると、二つの記述は特に大きな差はなかったが、細かいところは幾つかの違いが見られる。例えば、四府の出身地に関して、「天府出世」では、天府は「貴林県」で生まれたとするが、中国語で「貴 (guì)」と「桂 (guì)」の発音は同じであるため、同じ地名とも考えられる。「水府出世」では、水府は「広州府」で生まれたとするが、「接四府」では、「沙州府」で生まれたと記される。また、「陽間出世」では、陽間は「為州府」で生まれたとするが、「接四府」では、「吳州府」で生まれたとなっている。

さらに、「接四府」に記されている天府と水府の部分と同様に、「天府出世」においては、天府は商業神としての性格が強く見られ、「水府出世」においては、水府を水神とすることは明確であろう。

## 第7項 三將軍に関する記述

『三教源流聖帝佛祖搜神大全』によれば、三將軍は、即ち道教神の三元真君である。唐將軍は名を唐文明といい、上元道化唐真君である。葛將軍の名は葛文慶といい、中元護正葛真君である。周將軍は名を周文剛といい、下元定志周真君であるという[『三教源流聖帝佛祖搜神大全』1989: 99-100]。以下に、この三人の將軍に関する記述を述べる。

「唐葛周三將軍」<sup>39</sup>

上元唐將軍 領上白藤唐屋兒

中元葛將軍 領上白藤葛屋兒

下元周將軍 領上白藤周屋兒

郎叫弋聲你不應 郎叫二聲你不知

郎叫三聲你正應 三界將軍齊下壇

聞説今朝有状請 齊々整々降香壇

<訳>

上元の唐將軍は、嶺上にある白藤の唐家の息子である。

中元の葛將軍は、嶺上にある白藤の葛家の息子である。

下元の周將軍は、嶺上にある白藤の周家の息子である。

將軍を一回呼んでも答えず、二回呼んでも知らず、三回呼んだら答えた。

(上元・中元・下元) 三元の將軍は一緒に祭壇に降りてくる。  
現在招請を聞けば、整然として祭壇に降臨する。・

さらに「請下壇歌」に記された三將軍の部分を取り上げる。

「請下壇歌」に記された三將軍に関する記述<sup>40</sup>

啟請上元唐將君	岑上白藤唐屋兒
中元葛將軍	岑上白藤葛屋兒
下元周將軍	岑上白藤周屋兒
郎叫一声你不應	郎叫二声你不知
郎叫三声你正應	三個將軍齊下壇
聞說今朝有相請	齊々正々降香壇

〈訳〉

上元の唐將軍を請うことを申し上げる。嶺上にある白藤の唐家の息子である。

中元の葛將軍は、嶺上にある白藤の葛家の息子である。

下元の周將軍は、嶺上にある白藤の周家の息子である。

將軍は一回呼んで返事をしない。將軍は二回呼んでも知らず。

將軍を三回呼んで返事をした。三人の將軍は一緒に祭壇に降臨する。

現在招請を聞き、整然として祭壇に降臨する。

以上に紹介した二つの記述から見た三將軍は、三元(上元・中元・下元)に当てはまる三人の兄弟のような位置づけがなされている。

三將軍に関する記述は「又請下壇歌」に記されていることから、過山系ヤオ族(ミエン)の神々の中で、三將軍は下壇兵將として位置づけられていると考える。

## 第8項 元帥神に関する記述

本項では、元帥神を描写する記述を通して、元帥神の性格を見て行きたい。まず、「元帥呪」「雷公呪」を紹介したい。この二つの内容は殆ど同じであり、次のように記述している。

「元帥呪」-1<sup>41</sup>

都天大雷公	霹靂鎮虚空
統兵三千萬	■駕在雲宮
若有不伏者	雷令定不容
化為清淨此	雷宮大天尊



<訳>

都天にいる大雷公は、霹靂を起こし、虚空を鎮める。

三千万の兵を統率し、雲宮に駐在する。

もし従わない者がいれば、雷令は絶対に許さない。

此を清浄する。雷宮の大天尊である。

次に、「雷公呪」を取り上げる。

「雷公呪」<sup>42</sup>

郁都天大雷公	霹靂鎮虚空
統兵三千万	嚴駕紫雲宮
若有不報者	雷公定不容
押赴魁罡下	化為淨々中

<訳>

郁都天（意味は不明）にいる大雷公は、霹靂を起こし、虚空を鎮める。

三千万の兵を統率し、厳しく紫雲宮に駐在する。

もし報いない者がいれば、雷公は絶対に許さない。

（報いない者を）魁罡<sup>43</sup>の下に拘禁して赴き、（世の中は）清浄になる。

二つの記述中の「郁都天大雷公（郁都天にいる大雷公）」「霹靂鎮虚空（霹靂を起こり、虚空を鎮める）」「雷令定不容（雷令は絶対に許さない）」「雷宮大天尊（雷宮の大天尊である）」などの字句は、元帥神は霹靂を起こすことができ、雷宮（雷神の宮殿）に住し、雷令<sup>44</sup>を使える雷神の中での高位者であることを現している。「統兵三千万（三千万の兵を統率する）」とは、元帥は兵隊の統率者とする性格を現している。さらに、「若有不伏者（もし従わない者がいれば）」「雷令定不容（雷令は絶対に許さない）」などの字句は、賞罰を明らかにし、元帥としての威厳を強く現している。

さらに、異なる「元帥呪」の記述を取り上げる。

「元帥呪」-2<sup>45</sup>

勅封康元帥	護國救良民
上朝玄帝将	下界斬邪精
風雷前后奉	掃蕩鎮乾坤
手拿邪鉄剣	脚踏黒青雲
申天動倒地	収魔斬邪精
奏入金闕殿	黄涼化微塵
即速地祇司	康帥降来臨

<訳>

康元帥を勅封し、国を護り、善良な人民を救う。

天上界に出れば、玄帝の將軍を務める。人間の世界に下りれば、邪精を斬る。

風と雷は前後にかしずく。一掃して天下を平定する。

手に邪鉄劍を持ち、脚は黒青色の雲を踏む。

天から地まで、魔を収め、邪精を斬る。

金闕殿に上奏し、(意味不明)微塵になる。

速やかに(意味不明)、康元帥は降臨する。

この記述は、「康元帥」という元帥神を描写している。「上朝玄帝将(天上界に出れば、玄帝の將軍を務める)」の字句は、玄帝との関係が強調されている。「下界斬邪精(人間の世界に下りれば、邪精を斬る)」「収魔斬邪精(魔を収め、邪精を斬る)」の字句は、元帥の魔や邪精を滅ぼす性格を強く現している。「風雷前後奉(風と雷は前後にかしずく)」「掃蕩鎮乾坤(一掃して天下を平定する)」の字句は、元帥の威風を現している。また、「手拿邪鉄劍(手に邪鉄劍を持つ)」「脚踏黒青雲(脚は黒青色の雲を踏む)」というのは、元帥の姿を描写している。「風雷前後奉」の字句を除き、記述に雷と関わりがある部分は少なかったもので、雷神ほどの強力な性格は見られない。

さらに、「雷霆呪」という題名の記述を取り上げる。

「雷霆呪」<sup>46</sup>

雷霆元帥鄧元君      好做神通猛力神

手拿鉞斧随天轉      斬天斬地滅邪精

<訳>

雷霆元帥の鄧元君は、神通力がある神である。

手に鉞斧を持って天に従ってぐるぐる回る。天と地を斬り、邪精を滅ぼす。

この記述は、雷霆元帥の鄧元帥を描写しており、「好做神通猛力神」とは、鄧元帥は神通力があるということを現している。「手拿鉞斧随天轉」は、鄧元帥は、手に「鉞斧」を持っている様子を描き、「斬天斬地滅邪精」は、邪精を滅ぼす者という性格を現している。

以上紹介した元帥神に関する記述は、元帥神は雷神としての性格、兵の統率者としての性格、また邪精を滅ぼす者としての性格が強く現されている。

## 第9項 海播張趙二郎に関する記述

本項で紹介する海播神に関する記述は、大海播ではなく、黒龍に乗る海播張趙二郎である。記述は、以下の如くである。

「海嶺張召二」 47

啓請海嶺張召二	二郎学法在天門
你在天門借你脚	借你来龍問你長
你在来龍三百里	我是度錢童子郎
挑水煮飯同共吃	今夜小師不曾停
我有散金三百両	挑去殿上進老君
老君一聲来度法	手把人容掛我身
老君有条八倉劍	脚踏水車路地穿
老君殿上巍々坐	担得烏雲来到辺
郎行一步祖師決	又行二步祖師伝
三十六人齊下拜	思着當初学法時
六郎胆大開口問	又怕人多不得眠
眠得一更正是好	眠得二更正是愁
眠得三更人来捉	又着烏雲飛上天
把火来焼五瘟鬼	一時焼了五瘟神
老君捧出階前叫	十分留出一分人
手把刀頭都殺了	重留五鬼叫老君
聞說今朝有状請	張召二郎下壇前

〈訳〉

海嶺張召二郎を請うのを申し上げる。二郎は天門で法を学ぶ。  
 天門で二郎の脚を借りる。二郎の来龍を借りて…（意味不明）  
 二郎は来龍の三百里にいる。我は錢を計量する童子郎である。  
 水を汲んでご飯を炊いて一緒に食べ、今夜小師は留まることはない。  
 我は配ることの出来る金が三百両ある。宮殿の上まで担いで行き、老君に差し上げる。  
 老君は一声で法を度しにくる。手で人の容貌を我が身に掛ける。  
 老君は一本の八倉劍を持っている。脚は水車を踏み大地を穿つ。  
 老君は宮殿の上で高々と坐っている。烏雲を担いで近辺に来る。  
 郎は一步で祖師が選び出す。又二歩で祖師が伝授する。  
 三十六人は同時に礼をして、当初法を学ぶ時の様子を思い出す。  
 六郎は勇気があり、口を開いて問う。又人が大勢いて眠れない恐れがある。  
 一更まで眠れば、ちょっと良い。二更まで眠ったら、ちょっと困る。  
 三更まで眠ったら、人が捉まえに来た。  
 又烏雲に乗って天に飛んで上がる。火を持って五瘟鬼を燃やす。  
 一時、五瘟神を燃やした。老君は両手を捧げ、階段の前で叫ぶ。  
 十分の一の人を留出する。手で刀頭を持って全部殺した。



五鬼を再び残して老君を呼ぶ。

現在招請を聞けば、張召二郎は祭壇の前に降りてくる。

文中の「二郎学法在天門（二郎学法在天門）」「老君一聲来度法（老君は一声で法を度しにくる）」「郎行一步祖師扶（郎は一步で祖師が選り出す）」「又行二步祖師伝（又二步で祖師が伝授する）」などの字句は、海幡張召二が天門で法を学ぶ様子を描写している。彼に法を伝授するのは、老君あるいは祖師であると考えられる。また、「把火来焼五瘟鬼（火を持って五瘟鬼を燃やす）」「一時焼了五瘟神（一時、五瘟神を燃やした）」「重留五鬼叫老君（五鬼を再び残して老君を呼ぶ）」などの字句は、海幡張召二は五瘟神（鬼）<sup>48</sup>を祓う者としての性格を現している。

さらに、「海幡歌」という題名の記述を取り上げる。

「海幡歌」<sup>49</sup>

起請海幡張召二	聖主打瘟趙后神
南蛇纏頸下海去	海水奔波不濕身
回歸得見郎師父	脚踏刀梯見■床
聞説今朝有状請	齊々整々降香坛

<訳>

海幡張召二を請うことを申し上げる。聖主の瘟を打つ趙後神である。

南蛇は頸に纏わりついて海へ下って行き、波しぶきにも身は濡れず。

戻ってきたら郎の師父と会うことができ、脚は刀梯を踏み、■床を見る。

今、招請を聞けば、整然として祭壇に來臨する。

文中の「聖主打瘟趙后神」とは、海幡張趙二郎の瘟神を祓う者としての性格を現しており、前頁で紹介した「海幡張召二」に記されている性格と一致する。また「南蛇<sup>50</sup>」という名称の蛇が記されるが、神画では、海幡張趙二郎は黒龍（黒蛇）に乗る姿として描かれている。神画に描かれている黒龍（黒蛇）は、字句の南蛇であろう。また、「脚踏刀梯（脚は刀の梯を踏む）」と記される。刀の梯を踏み上がるシーンは海幡神画に描かれているが、海幡張趙二郎神画に描かれていない。この事例から、大海幡と海幡張趙二郎の二神を同一神として取り扱っていると考えられる。

## 第10項 太尉に関する記述

「太尉」という言葉の意味は、中国、古代官職の中で位が最も高い武官のことを指す。神画には、太尉は白馬に乗り、手に剣を持つ武官の容姿として描かれている。太尉と称されるこの神は、間違いなく武官であると考えられる。太尉について、次に幾つかの記述を通して考察したい。

『請聖書』と『賞光書』の中では、太尉という題名の歌が全くないので、一つの単独の歌として紹介することはできない。しかし、「賞浪兵頭」「接祖師」などには、太尉と関わりがある記述が

見えるため、これらを紹介することを通じ、太尉という神の性格を明らかにしたい。

まず、「賞浪兵頭」という題名の記述である

「賞浪兵頭」<sup>51</sup>

去時有功帰有賞	後生賞浪我兵頭
毎日差兵輪流轉	未曾冷落我兵頭
太尉南朝李十六	部兵李十二
通天李十一	坐壇一堆鬼

<後略>

<訳>

行く時に功が有り、帰れば賞が有り、若い男子が我兵頭を賞する。  
毎日、兵を派遣し、順番に回る。未だかつて、我が兵頭を粗末に扱わなかった。  
太尉の南朝李十六、部兵の李十二、天に通じる李十一、壇に坐り一山の鬼

さらに「退下阜老賞浪」の記述を取り上げる。

「退下阜老賞浪」<sup>52</sup>

去是有功帰有賞	後生賞浪我兵頭
毎日帯兵乱流轉	未存来落我兵頭
太尉南朝李十六	部兵李十二通天李十一

<後略>

<訳>

行く時に功が有り、帰れば賞が有り、若い男子が我兵頭を賞する。  
毎日、兵を統率し、且つ、往来する。未だかつて、我が兵頭を安置せず、  
太尉の南朝李十六、部兵の李十二、天に通じる李十一

さらに「接祖師」の記述を取り上げる。

「接祖師」<sup>53</sup>

踏上何勿殿上去	踏上何勿殿上行
何勿殿上接靈聖	何勿殿上接靈神
踏上梅完殿上去	踏上梅完殿上行
梅完殿上接靈聖	梅完殿上接靈神
太尉南朝李十六	竹葉六郎十六郎
六郎有錢無沙数	黄昏洒脚上娘床
少年胆大亦無■	老来修道要焼香

一世清斎不吃肉 未曾遭罪殺猪羊

〈後略〉

〈訳〉

踏み上がって何殿へ行く。踏み上がって何殿で行く。

何殿の上で霊聖を接する。何殿の上で霊神を接する。

踏み上がって梅完殿へ行く。踏み上がって梅完殿へ行く。

梅完殿の上で霊聖に接する。梅完殿上で霊神に接する。

太尉の南朝李十六、竹葉六郎十六郎、六郎は錢があり(意味は不明)夕方に足を洗い、娘のベッドに上がる。

少年は大胆であり(意味は不明)、老いてきたら修行して線香を焚く

一生精進して肉を食わず、未だかつて苦しい目にあうことがなく、猪と羊を殺すことはない。

以上に紹介した「賞浪兵頭」「退下阜老賞浪」「接祖師」の三つの記述とも、「太尉南朝李十六(太尉の南朝李十六)」という字句が見られる。注目したいのは、「李十六」という神名である。この李十六という神は太尉であると考えられる。

「賞浪兵頭」「退下阜老賞浪」のはじめには、「去時有功帰有賞(行く時に功が有り、帰れば賞が有る)」「後生賞浪我兵頭(若い男子は我兵頭を賞する)」などの字句が置かれている。よって、この二つの記述は、兵頭(兵の隊長)を賞するために、歌われる歌であると考えられる。内容には、「太尉南朝李十六」と並び、「部兵李十二」「通天李十一」も記されている。この三神とも兵頭であると考えられるが、官階(官職の等級)は異なる。記述中での並び順によって、太尉である李十六の位が最も高く、その次は部兵である李十二、最後は李十一とする。三人とも李姓であるため、兄弟であるかもしれない。

次に、「接祖師」の内容について検討する。「接祖師」は、祖師を迎える歌であると考えられる。記述のはじめには、「踏上何勿殿上去」「踏上何勿殿上行」「何勿殿上接霊聖」「何勿殿上接霊神」「踏上梅完殿上去」「踏上梅完殿上行」「梅完殿上接霊聖」「梅完殿上接霊神」のような問答の字句があり、どこへ行って何をするのか、梅完殿へ行行ってそこで祖師を迎えるというようなことを述べている。その次に、「太尉南朝李十六」が出てくるが、この文脈から見ると、太尉である李十六は文中の祖師であろう。

実際に『請聖書』には、「李十六」という題名がたくさん見られる。そのため、以下に、「李十六呪」という題名の記述を挙げる。

「李十六呪」<sup>54</sup>

奉請通天李十六。 啟請仙師少一官

部兵猛将力威勇 急速到壇来助法

五七將軍為大將 統領三千六万兵

世上人民多敬奉 三壇位上有郎名



川起神通天地動	■枷打鎖佩神通
少一部不兵来應	師父作法救人民
父法到壇来接請	行罡脚步不曾停
上帝行前莫行後	便将何法變吾身
開壇接請吾師到	威風凜々鎮乾坤
若有邪師為網魘	收入炉中罪不輕
白衣使者身着祿	速歸本県陀羅弥

〈訳〉

通天李十六を請う。仙師、若い官を請うことを申し上げる。  
 部兵や猛将たちは威力があり勇敢であり、急ぎ速やかに祭壇に来て法を助ける。  
 五七將軍は大将であり、三千六万の兵士を統率する。  
 世の中の人々はとても尊敬し祭る。三壇位上に郎の名がある。  
 神通が現れて天地も動く。枷と鎖を叩いて神通を佩く。  
 部兵統率して応じに来る。師父は法を作り、人民を救う。  
 壇を開き、我が師が降臨するのを迎える。罡歩は止まることなく行く。  
 玄天上帝は前に、我は後ろに行く。法を使って我身を変ずる。  
 若し邪師は魘魘とならば、重い罪として炉の中に収め入れる。  
 白衣の使者は祿を着る。速やかに本県に帰り、陀羅弥。

この記述は、李十六を描写している。「啟請仙師少一官（仙師、若い官を請うことを申し上げる）」「部兵猛将力威勇（部兵や猛将たちは威力があり勇敢である）」「急速到壇来助法（急ぎ速やかに祭壇に来て法を助ける）」は、記述のはじめに置かれる字句であるが、李十六は勇猛であり、非常にパワーを持つ武官であることが読み取れる。次の、「五七將軍為大将（五七將軍は大将であり）」「統領三千六方兵（三千六万の兵士を統率する）」という字句は、李十六は兵将を統率する最も位が高い武官であることを現している。「世上人民多敬奉（世の中の人々はとても尊敬し祭る）」「三壇位上有郎名（三壇位上に郎の名がある）」「川起神通天地動（神通が現れて天地も動く）」「■枷打鎖佩神通（枷と鎖を叩いて神通を佩く）」などは、李十六は神通が現れれば、天地も動き、威風凜々たる武官であり、さらに世の中の人々に尊敬されている神であることを現している。また、「若有邪師為網魘（若し邪師は魘魘とならば）」「收入炉中罪不輕（重い罪として炉の中に収め入れる）」からは、李十六が邪師を処罰する権限を持つ神であることが読み取れる。

神画に描かれている太尉は白馬に乗り、剣を持っている。彼の後ろに「令」という字が書かれた旗を持つ脇侍が立っている。画面の構成から、太尉は兵士を統率する武官であると見える。神画に描かれている「太尉」と本項で紹介した「李十六」は、いずれも性格が似ており、同じ神であろう。

第3節 儀礼文献から見た神画に描かれる神々

本章では、『請聖書』『賞光書』に収められた神々に関する記述を分析した。過山系ヤオ族(ミエン)儀礼神画に描かれる元始天尊・靈寶天尊・道德天尊・玉皇・聖主・張天師・李天師・天府・地府・水府・陽間・鄧元帥・馬元帥・大海旛・海旛張趙二郎・太尉・十殿などの神々が、宇宙が混沌としていた時に誕生したことが明らかになった。また、各々の神の生年月日、誕生時刻、衣の色、冠物、持物、乗物などについての詳細が分かり、神々の性格まで記述されていることを明らかにできた。以下、文献記述から判明できた神々に関することを下の表にまとめる。

表 22 儀礼文献から読み取れた神々の情報一覧表

神々の名称	生年月日・誕生時刻	着物の色/冠物/持物/乗物/その他	性格
元始天尊	庚辰年 2 月 15 日寅時	黒衣/金冠/宝鏡/蓮の花	法が高く、邪精を滅ぼす勅令者である
靈寶天尊	甲子年 1 月 15 日寅時	藍衣・仙衣/金冠/扇子/蓮の花	邪精を滅ぼす勅令者である
道德天尊 〈太上老君〉	洪武年 1 月 15 日寅時	龍衣/鏡/白髪	道が高く、邪鬼を滅ぼし、善も知り凶も知る統率者であり、兵を使役できる
玉 皇	己酉年 1 月 19 日寅時	黄衣/冕/圭/瑞雲	邪悪を駆除し、正義を正し、兵を使役でき、大堂兵に位置づける
聖 主	丁卯年 7 月 15 日	黒衣/冕/圭	邪鬼を滅ぼし、大堂兵に位置づける
天 府	戊卯年 5 月 15 日午時/ 桂林県で生まれる。	紅衣/圭	
地 府	己卯年 6 月/広州府で 生まれる。	黒衣	
陽 間	卯辰年 3 月 15 日寅時/ 呉州府で生まれる。	紅衣/蓮の花	
水 府	甲午年 9 月 7 日午時/ 沙州府で生まれる。	緑衣/冕/圭/金帯	水神である
張 天 師	庚辰年 2 月 9 日真昼	八卦模様の紅衣/金冠/ 圭/羅靴	諸々の法ができ、法術が高く、法を伝授する師とし、大堂兵に位置づける
李 天 師	卯子年 5 月 15 日寅時	黒衣/亀と蛇/宝剑	法を教える
鄧 元 帥		紅衣/鉞斧/	雷神であり、祭壇を守備し、乾坤を鎮め、邪鬼を滅ぼす
馬 元 帥	小年 18 日春	紅衣鎧/玉斧	雷神である
關 元 帥		金鎧/鉄鎖	雷神であり、祭壇を守備する

第5章 儀礼文献に記される神々に関する記述の分析

康元帥		邪鉄剣/黒青雲	雷神であり、玄帝の部下を務め、魔を収め、邪精を滅ぼす
大海番	丙午年8月15日真昼	紅衣・金鎧/脚踏火磚・手拿犁頭・口咬犁頭	法を伝授する
海旛張趙二郎			五瘟を祓う者とする性格
太尉	戊寅年12月15日寅時	紅衣/白馬/	法を伝度する祖師である。兵を統率でき、邪師を処罰できる高位武将である
十殿			陰陽を定め、罪を赦免する
唐將軍			上元將軍
葛將軍			中元將軍
周將軍			下元將軍

表に記されることを述べると、元始天尊は、庚辰年2月15日寅時に生まれ、黒色の衣を着、金冠を冠り、宝鏡を持ち、蓮の花を踏む。法が高く、邪精を滅ぼす性格が見られる。

靈寶天尊は、甲子年1月15日寅時に生まれ、藍色の衣を着、金冠を冠り、扇子を持ち、蓮の花を踏む。邪精を滅ぼす性格が見られる。

道德天尊は、洪武年1月15日寅時に生まれ、龍の模様の衣を着、鏡を持ち、髪の毛が白い。道が高く、邪鬼を滅ぼし、善悪を知る統率者であり、兵を使役できる。

玉皇は、己酉年1月19日寅時に生まれ、黄色の衣を着、冕を冠り、圭を持ち、瑞雲を踏む。邪悪を駆除し、正義を正し、兵を使役でき、大堂兵に位置づけられている。

聖主は、丁卯年7月15日に生まれ、黒色の衣を着、冕を冠り、圭を持つ。邪鬼を滅ぼし、大堂兵に位置づけられている。

天府は、戊卯年5月15日午時に、桂林県で生まれる。紅色の衣を着、圭を持つ。

地府は、己卯年6月に、広州府で生まれ、黒色の衣を着る。

陽府は、卯辰年3月15日寅時に、呉州府で生まれる。紅色の衣を着、蓮の花を踏む。

水府は、甲午年9月7日午時に、沙州府で生まれる。緑色の衣を着、冕を冠り、圭を持ち、金の帯を付ける。水神である。

張天師は、庚辰年2月9日真昼に生まれ、八卦模様の紅色の衣を着、金冠を冠り、圭を持ち、羅靴を履く。法術が高く、法を伝授する師とする存在であると見られる。大堂兵に位置づけられている。

李天師は、卯子年5月15日寅時に生まれ、黒色の衣を着、亀と蛇を踏み、体の横に宝剣が立てられる。法を教える師とする存在であると見られる。

鄧元帥は、紅色の衣を着、鉞斧を持つ。乾坤を鎮め、邪鬼を滅ぼす雷神であり、祭壇を守備する役目を持つと見られる。

馬元帥は、小年18日春の時に生まれ、紅色の鎧を着、玉斧を持つ。雷神である。

關元帥は、金の鎧を着、鐵の鎖を持つ。雷神であり、祭壇を守備する役目を持つと見られる。



康元帥は、邪鉄剣を持ち、黒青雲を踏む。魔を収め、邪精を滅ぼす雷神であり、玄帝の部下を務めると見られる。

大海旛は、丙午年8月15日真昼に生まれる。紅色の衣を着、金の鎧を着、火磚を踏み、犁先を持ち、あるいは犁先を嚙む。法を伝授する師であると見られる。

海旛張趙二郎は、太上老君に従って法を学び、五瘟を祓う者であると見られる。

太尉は、戊寅年12月15日寅時に、紅色の衣を着、白馬に乗る。兵を統率し、邪師を処罰できる位が高い武将神である。法を伝授する祖師とする存在であると見られる。

十殿は、陰陽を定め、罪を赦免するという性格が見られる。

唐將軍・葛將軍・周將軍は、それぞれに上元將軍・中元將軍・下元將軍にあたる。

以上から、文献記述から判明したこれらの神々の衣の色・冠物・持物・乗物は、儀礼神画に描かれる内容の読み取りによって作成した異同表（表1～表19）の同項目に示している内容とほぼ一致していることが分かる。しかしながら、これらの神の生年月日及び性格は、儀礼神画に描かれるものではなく、文献記述からしか読み取れないものである。

儀礼文献と儀礼神画は過山系ヤオ族（ミエン）が伝承している儀礼において組み合わせて用いられるものである。神画を用いる儀礼において、祭司は神画を祭壇に掛けてから、必ず神画の前で神々を祭壇に降臨するように招請する「請聖」儀礼を行う。この際に、本章の第2節で取り扱った『請聖書』に収められる神画に描かれる神々に関する記述などが読誦される。神画を祭壇に掛けることは、儀礼においてどの神が招請されるのか、祭場においてその神の居場所はどこであるのか、またその神はどのような容貌でどの格好であるのかを絵画で示すものである。『請聖書』に収められる神々に関する記述を読誦することによって、神々が祭場まで招かれて着席し、そこでこれらの神々はいつ、どこで生まれ、どのような格好であり、何を持ち、何動物に乗り、どういう性格であるのかを紹介される。こうした儀礼神画と儀礼文献はそれぞれ独立するものではなく、儀礼において両者は互いに補足しながら共同して過山系ヤオ族（ミエン）の信仰している神の世界を現す重要な役割を果たしているのである。

## [注]

<sup>1</sup> 神奈川大学ヤオ族文化研究所に収集されている、湖南省藍山県の過山系ヤオ族（ミエン）が所持する請聖書の表紙写真資料である。文献番号：A-16b。写真番号：DSC\_1983、DSC\_1987。撮影者：泉水英計。

<sup>2</sup> 神奈川大学ヤオ族文化研究所に収集されている、湖南省藍山県の過山系ヤオ族（ミエン）が所持する賞光書の表紙写真資料である。文献番号：A-19。写真番号：IMG\_2302。撮影者：廣田律子。

<sup>3</sup> 神々を招請する儀礼である。

<sup>4</sup> 張勁松によれば、上光は師を拝する儀礼で、師郎（学徒）は「上光童子」の身分で師を拝し法を学ぶとする。儀礼は上光・猜光・引光・献光・脱童の諸段に分けて行われるとする。[張勁松ほか 2002：168]

<sup>5</sup> 神奈川大学歴民調査報告書第12集・『中国湖南省藍山県ヤオ族儀礼文献に関する報告Ⅰ』には、2008年11月26日から12月13日までに湖南省藍山県湘蘭村で行われた度戒儀礼の程序について詳細に報告している。程序にそって、度戒儀礼では請聖儀礼（請初夜聖・請中夜聖・請末夜聖）と上光儀礼が行われた。それぞれの儀礼が行われる際に、請聖書と賞光書は儀礼を担当する宗教職能者によって読誦された[神奈川大学歴民調査報告書第12集・『中国湖南省藍山県ヤオ族儀礼文献に関する報告Ⅰ』2011：7-24]。また『神

奈川大学歴民報告書第14集・中国湖南省ヤオ族儀礼文献に関する報告Ⅱ』には、2011年11月16日から11月21日までに湖南省藍山県所城鎮幼江村で行われた還家願儀礼の程序について詳細に報告している。程序にそって、還家願儀礼では請聖儀礼と上光儀礼が行われた。それぞれの儀礼が行われる際に、請聖書と賞光書が読誦された[神奈川大学歴民報告書第14集・『中国湖南省ヤオ族儀礼文献に関する報告Ⅱ』2012:38-51]。

<sup>6</sup> 神奈川大学ヤオ族文化研究所が南山大学人類学博物館での上智大学西北タイ歴史文化調査団の文献資料の調査は、2011年から2012年まで3回実施した。[神奈川大学歴民報告書第17集・『南山大学人類学博物館所蔵上智大学西北タイ歴史文化調査団収集文献目録』2014:164]

<sup>7</sup> 神奈川大学ヤオ族文化研究所収集写真資料である。文献番号9-9。写真番号:DSC\_7475~DSC\_7480。

<sup>8</sup> 天と地がまだ分れず、混じり合っている状態。

<sup>9</sup> 「羅」の意味は不明であるため、訳していない。

<sup>10</sup> 徐整が『三五歴紀』の中で、盤古の天地開闢について記している。欧陽詢が『芸文類聚・上』中で、それを引用し、記述内容は次のようとなる。「徐整三五歴紀曰、天地渾沌如鶏子、盤古生其中。万八千歳、天地開闢、陽清為天、陰濁為地。天日高一丈、地日厚一丈、盤古日長一丈、如此万八千歳。天数極高、地数極深、盤古極長。後乃有三皇。数起于一、立于三、成于五、盛于七、处于九、故天去地九万里」[欧陽詢 1965:2-3]。

<sup>11</sup> この記述の中で用いられる「置」とは、世の中になくものを設立し、作り出す意味であろう。

<sup>12</sup> 海の龍神の住むところであろう。

<sup>13</sup> 「竹」は「燭」の同音異字であるため、ここの「竹火」は「燭火」であると考え、灯りであろう。

<sup>14</sup> 「同」は「筒」の同音異字であるため、ここの「経同」は「経筒」であると考え、経典を入れる竹筒のことであろう。

<sup>15</sup> 「清」と「青」の中国語の発音は同じである。よってここの「清」は同音異字の「青」であろう。

<sup>16</sup> 「連」は「蓮」の同音異字であるため、ここの「連花」は「蓮花」であると考え、蓮の花である。

<sup>17</sup> 「沙」は「紗」の同音異字であり、「保」は「宝」の同音異字であろう。

<sup>18</sup> 「天平」は、水府が冠る冕の上に付けた「冕板」という平の板を指していると考え。ここでは水府が冠る冕を表していると考え。

<sup>19</sup> 「京」は「経」の同音異字であろう。

<sup>20</sup> 「越」は「鉞」の同音異字であると考え。武器の鉞(まさかり)であろう。

<sup>21</sup> 天にある雷神らの役所である「郁都天」を指しているだろう。

<sup>22</sup> 「庭」は「霆」の書き間違い

<sup>23</sup> 中国語の中で、東「dōng」と彤「tóng」の発音は非常に相似する。よって、「紅東東」は「紅彤彤」であり、真っ赤の意味であると考え。

<sup>24</sup> ここの「街」は、同音異字の「階」であり、閻王らが居る官庁を示していると考え。

<sup>25</sup> ここの「教堂」は、教会堂のことではなく、儀礼を行う祭場を指しているだろう。

<sup>26</sup> 神奈川大学ヤオ族文化研究所収集写真資料である。文献番号:A-32a。写真番号:IMG\_4288~IMG\_4291。撮影者:廣田律子。神奈川大学文化研究所より発行された、『通説第3号』「度戒儀礼に見える神々:呉越地方・台湾の民間宗教者の儀礼と比較して」において、松本浩二は請聖書(A-32a, A-20)の神々に関する呪文を日本語に訳し、神々の性格について考察した[松本 2011:24-34]。本節でA-32aとA-20に当たる神々の呪文と歌については、松本浩二の日本語訳を参考することにする。

<sup>27</sup> 神奈川大学ヤオ族文化研究所収集写真資料である。文献番号:A-11。写真番号:IMG\_1232s~IMG\_1233s。撮影者:廣田律子。

<sup>28</sup> 「大道」は、三清または高位の神を指していると考えられる。ここでは三清と推察する。

<sup>29</sup> 神奈川大学ヤオ族文化研究所収集写真資料である。文献番号:A-11。写真番号:IMG\_1238s~IMG\_1239s。撮影者:廣田律子。

<sup>30</sup> 「戴」は「帯」の同音異字であると考え。文中の「帽戴」は帽子の両辺に飾られている紐のことを指していると考え。

<sup>31</sup> 神奈川大学ヤオ族文化研究所収集写真資料である。文献番号:A-19。写真番号:IMG\_2343s。文献番号:A-30a。写真番号:IMG\_3453s。撮影者:廣田律子。

<sup>32</sup> 神奈川大学ヤオ族文化研究所収集写真資料である。文献番号:A-11。写真番号:IMG\_1239s。撮影者:

廣田律子。

33 神奈川大学ヤオ族文化研究所収集写真資料である。文献番号:A-19。写真番号:IMG\_2343s-~IMG\_2344s-、A-30a IMG\_3453s-。撮影者:廣田律子。

34 神奈川大学ヤオ族文化研究所収集写真資料である。文献番号:A-11。写真番号:IMG\_1240s-~IMG\_1241s-。撮影者:廣田律子。

35 神奈川大学ヤオ族文化研究所収集写真資料である。文献番号:A-19。写真番号:IMG\_2344s-~IMG\_2345s-、文献番号:A-30a。写真番号:IMG\_3453s-~IMG\_3454s-。撮影者:廣田律子。

36 「身をよく寄せられる」という意味の他に、「姿かたちを好くする」の意味もあろう。

37 神奈川大学ヤオ族文化研究所収集写真資料である。文献番号:A-19。写真番号:IMG\_2345s-~IMG\_2346s-、文献番号:A-30a。写真番号:IMG\_3454s-~IMG\_3456s-。撮影者:廣田律子。

38 神奈川大学ヤオ族文化研究所収集写真資料である。文献番号:A-32a。写真番号:IMG\_4390~IMG\_4392。撮影者:廣田律子。

39 神奈川大学ヤオ族文化研究所収集写真資料である。文献番号:A-32a。写真番号:IMG\_4379~IMG\_4382。撮影者:廣田律子。

40 神奈川大学ヤオ族文化研究所収集写真資料である。文献番号:A30a。写真番号:IMG\_3442s-。撮影者:廣田律子。

41 神奈川大学ヤオ族文化研究所収集写真資料である。文献番号:A-21。写真番号:IMG\_3019s-。撮影者:廣田律子。

42 神奈川大学ヤオ族文化研究所収集写真資料である。文献番号:A-32a。写真番号:IMG\_4320s-。撮影者:廣田律子。

43 魁罡は、陰陽家の語であり、魁岡・魁綱に同じ。陰陽家は魁罡が房に在るのを忌む[『大漢和辞典・巻十二』1991:685]。

44 『道教大辞典』によれば、雷令は、法具の名称であり、令牌あるいは五雷牌とも呼ばれる。儀礼時神々を招請する際に不可欠な法具である。雷令を使うと、雷神を使役することができ、また魔をよけることもできるという[『道教大辞典』1995:393]。ここの雷令は、法具ではなく、雷神の法令であろう。

45 神奈川大学ヤオ族文化研究所収集写真資料である。文献番号:A-32a。写真番号:IMG\_4304s-。撮影者:廣田律子。

46 神奈川大学ヤオ族文化研究所収集写真資料である。文献番号:A-32a。写真番号:IMG\_4303s-。撮影者:廣田律子。

47 神奈川大学ヤオ族文化研究所収集写真資料である。文献番号:A-11。写真番号:IMG\_1243s-~IMG\_1244s-。撮影者:廣田律子。

48 五瘟神に関しては、請聖書には、「送五瘟神」という題名の記述があり(神奈川大学ヤオ族文化研究所収集写真資料である。文献番号:A-31。写真番号:IMG\_6160s-。撮影者:廣田律子。)、その内容は「春季春瘟、夏季夏瘟、秋季秋瘟、冬季冬瘟、一年四季、行瘟使者、行病城隍、天符、地符、遊日遊夜官符、非来官符、横来官符、〈後略〉」となる。この記述は、瘟神や病をもたらす神々の名が羅列されている。記述によって、五瘟神は、春の春瘟神、夏の夏瘟神、秋の秋瘟神、冬の冬瘟神、四季行瘟使者であると分かる。

49 神奈川大学ヤオ族文化研究所収集写真資料である。文献番号:A-32a。写真番号:IMG\_4375~IMG\_4376。撮影者:廣田律子。

50 請聖書には、「南蛇出世」(神奈川大学ヤオ族文化研究所収集写真資料である。文献番号:A-11。写真番号:IMG\_1241s-~IMG\_1243s-。撮影者:廣田律子。)という題名が収められている。その内容は「斬法地頭架火車、馬山上架龍車、九龍清水苗龍浪、大海中心是我家、世上凡人不得見、張召二郎到我家、聞説今朝有状請」とある。そこから、南蛇は海に住み、世の中の人々は見たことがない神獣であるというように読み取れる。「張召二郎到我家」の字句は、海旛張趙二郎との関係を強調している。

51 神奈川大学ヤオ族文化研究所収集写真資料である。文献番号:A-11。写真番号:IMG\_1188s-~IMG\_1189s-。撮影者:廣田律子。

52 神奈川大学ヤオ族文化研究所収集写真資料である。文献番号:A-19。写真番号:IMG\_2372s-。撮影者:廣田律子。

53 神奈川大学ヤオ族文化研究所収集写真資料である。文献番号:A-19。写真番号:IMG\_2323s-~IMG\_2324s-。撮影者:廣田律子。

54 神奈川大学ヤオ族文化研究所収集写真資料である。文献番号:A-32a。写真番号:IMG\_4405~IMG\_4406。撮影者:廣田律子。



### 第6章 儀礼実践から見た過山系ヤオ族(ミエン)儀礼神画の使用

本章では、湖南省永州市藍山県の過山系ヤオ族(ミエン)の祭司は如何なる宗教段階を経て神画の使用資格を得るのか、儀礼に用いられる神画にはどのような意味があるのか、また儀礼において神画はどのような役割を果たしているのかについて、神画を用いる儀礼内容を考察することによって明確にする。

#### 第1節 神画を用いる儀礼について

湖南省永州市藍山県の過山系ヤオ族(ミエン)の行う様々な儀礼において、必ずしも神画を使用するものばかりではない。祭司の趙金付氏によると、儀礼程序に「撥兵<sup>1)</sup>」「請作証<sup>2)</sup>」「開天門」の儀礼科目が入るならば、神画を祭壇に掛けなければならないという。具体的な例を挙げると、通過儀礼の「還家願」「度戒」「葬送」儀礼、また冤を解く「解冤」儀礼は、いずれも撥兵・請作証・開天門の科目があり、神画を必要とされる儀礼である。これらの儀礼に対して、神画を使用しない儀礼も行われている。年中行事として行われる「送船」儀礼、日頃行われる儀礼として、治病のための「架橋」儀礼、安産のための符を授けるなどの儀礼は、撥兵・請作証・開天門の科目を伴わないため、神画は使用しない。

本章では、神画の開光儀礼を含め、神画を用いる儀礼を主なる対象として考察するものである。取り上げる全ての儀礼は、中国湖南省永州市藍山県の過山系ヤオ族(ミエン)が伝承している儀礼である。

#### 第2節 儀礼神画の所持及び使用の資格について

儀礼において、神画の所持及び使用の資格を持っていないければ、神画を儀礼の場に持ち込むこと、そして使用することができない。そのため、本章では、儀礼実践中での神画の使用を考察する前に、まず神画使用者である祭司は、どのような儀礼段階を経て神画の所持及び使用の資格を得てきたのかを考察して行く。

これまでの過山系ヤオ族(ミエン)が伝承している儀礼に関する先行研究では、儀礼において神画がどのように使用されるのかについて触れてはいるものの、神画を中心として研究を進めていない。例えば、竹村卓二は、『ヤオ族の歴史と文化』の中で、タイの過山系ヤオ族(ミエン)の通過儀礼の各段階を経て受礼者は異なる陰兵数を獲得するとされているが、陰兵の伝授と神画の使用との意味について触れていない[竹村 1981 : 159-172]。廣田律子は、「湖南省永州市藍山県過山系ヤオ族の祭祀儀礼と盤王伝承」の中で、盤家の還家願儀礼通じて、盤王との契約と履行を重点的に論じているが、還家願儀礼において掛三灯を経てそして「行師」神画を使用することまでは言及したものの、「行師」神画を使用することの意味について考察していない[廣田 2013b : 1-23]。筆者のヤオ族の祭司への聞き取り調査によれば、祭司になる者は「掛三灯」儀礼を経れ

ば、はじめて「行師」神画を所有する資格を得、「度戒」儀礼を経れば、「三清兵馬」神画を所有する資格を得ると聞いている。そのため本項において「掛三灯」と「度戒」儀礼での授法に関する実態について詳述し、その上で、授法と神画との関連、神画を所有する意味について解釈したい。

以下では、実際の「掛三灯」と「度戒」儀礼を通じて授法と関わりがある部分を取り上げ、授法の状況を見て行きたい。

### 第1項 「掛三灯」儀礼における授法の状況について

「掛三灯」儀礼は世界に広く分布している過山系ヤオ族(ミエン)がどこに移住しても必ず伝承している儀礼である。湖南省永州市藍山県において、「掛三灯」儀礼は、また「掛家灯」といい、略して「掛灯」とも称する。以下では、藍山県で行われた幾つかの「掛三灯」儀礼を構成する儀礼名を示す。

1) 湖南省永州市藍山県紫良瑶族郷高源村石頭地「還家願」儀礼中の「掛家灯」[張勁松ほか 2002 : 89-130]

化変・勅変米・藏身/変身・昇灯・解厄・取法名・退灯・分兵・退碗・撥法・定陰陽・行罡・許催春願

2) 2006 年湖南省永州市藍山県湘蘭村「還家願」儀礼中の「掛家灯」[廣田 2011a : 317-385]

上光・封斎・昇老君櫓・化変・昇灯/取法名・撥兵撥將・接香炉・撥法・定陰陽・祝詞・学揺鈴行罡・脱童

3) 2008 年湖南省永州市藍山県匯源瑶族郷湘蘭村「度戒」儀礼中の「補掛三灯」[『神奈川大学歴民調査報告第12集・中国湖南省永州市藍山県ヤオ族儀礼文献に関する報告Ⅰ』2011 : 37-45]

請師・勅変水・勅変米・勅変布・勅変銭・勅変櫓・打櫓・昇櫓・穿衣・踏蓮花・収煞・収伏断・藏身・起寸・変吾身・昇灯・掛三灯・退灯・撥橋(補橋)・撥路・撥兵・撥法・分兵・吹米・定陰陽・退蓮花・接香炉・学打鑼・学吹牛角(伝師棍伝卦)・学用鈴(伝牙簡伝銅鈴)・抬轎子・学走罡歩(伝七星罡歩)・学舞学揺鈴

4) 2011 年湖南省永州市藍山県所城鎮幼江村「還家願」儀礼中の「掛三灯」[『神奈川大学歴民調査報告第14集・中国湖南省永州市藍山県ヤオ族儀礼文献に関する報告Ⅰ』2012 : 33-116 ; 神奈川大学ヤオ族文化研究所ホームページ]

勅変水・勅変米・勅変櫓・打櫓・昇櫓・穿衣・藏身・踏蓮花・変吾身・起寸・収伏断・昇灯・掛三灯・退灯・撥橋撥路撥兵撥法・分兵・吹米・退蓮花・接香炉・学打鑼・学吹牛角・

定陰陽・学走罡歩・学揺鈴・学舞

以上示した「掛三灯」儀礼を構成する儀礼名の中に、筆者は「三灯」を掛ける前に行われる「勅変水」「勅変米」「勅変布」「勅変銭」儀礼と、「掛三灯」儀礼の中心部分<sup>3</sup>となる「掛灯」「撥兵撥将」「分兵」「吹米」「学揺鈴」「学走罡歩」などの直接授法と関わりがある儀礼に注目している。次には、これらの儀礼で具体的にどのようなことが行われ授法されたのかを詳述する。

### 1-1. 「勅変水」「勅変米」「勅変布」「勅変銭」

「勅変水」「勅変米」「勅変布」「勅変銭」儀礼を行う際に、祭司は、下記の儀礼文献を読誦しながら、水・米・白布・銭を変化させる。文献の内容によると、水は「観音楊柳之水（観音の柳の水）」「真武之水（真武大帝の水）」「五雷殿上之水（五雷殿にある水）」「八大金剛之水（八大金剛の水）」「三壇之水（三壇の水）」「雲霧之水（雲と霧の水）」という邪鬼を滅ぼすことができる水になり、米は「千兵万馬（千万の兵馬）」になり、白布は「金橋（金の橋）」になり、銭は「三十六名雄兵（36名の強力な兵）」になると記されている。これらの変化したものは「三灯」を掛ける際に、「撥橋」「撥路」「撥兵」「撥将」「撥法」などの儀礼を通じ、受礼者に伝授される。そのため、ここでは授法と関わる重要な儀礼として紹介した。

#### ◆「勅変水」「勅変米」「勂変布」「勂変銭」の際に読誦される儀礼文献<sup>4</sup>

変水、二变此水化為観音楊柳之水、三变此水為真武之水、四变此水化為五雷殿上之水、五变此水化為八大金剛之水、六变此水化為三壇之水、連連化為雲霧之水、邪鬼自滅、吾奉太上老君急急如令勅

变米、此米不是非凡之米、米是化為天星養人之米、吾師將來化為千兵万馬、抛散速上壇前、將來抛把師男、速变速化、速速变化、吾奉太上老君急急如令勅

变布、此布不是非凡之布、布是化為三尺六寸、白布化為青竹、蛇化為金橋、吾師將來、抛把師男速变速化、吾奉太上老君急急如令勅

变銭、此銭不是非凡之銭、銭是三十六文銅銭、化為三十六名雄兵、吾師將來、抛把師男、速变速化、吾奉太上老君急急如令勅

### 1-2. 「掛三灯」儀礼の中心部分

この部分では、「昇灯」「掛灯」「取法名」「撥橋」「撥路」「撥兵」「撥将」「撥法」「分兵」「吹米」「接香炉」「学打鑼」「学吹牛角」「学用卦」「学揺鈴」「学罡歩」などの儀礼が行われている。

#### 1-2-1. 「昇灯」「掛灯」

「昇灯」「掛灯」儀礼を行う際に、祭司は、灯明を持って祭壇に掛けられている神画に描かれ



ている神々対して「掛三灯」を証盟するように願う。それから、受礼者の前に立て置かれる灯明立てに三つの灯明を置き、「掛灯」をする。

三つの灯明について、廣田律子によると、受礼者本人から見て左の灯明は本命毫光灯、中央は一族を代表する祖宗灯、右は代々の祭司を表す祖師灯を表しているという[廣田 2011a : 324]。また、松本浩二は『掛三燈』の儀礼の中で、掛三灯儀礼の際に用いられる文献の分析によると、「第一番目が祖宗すなわち祖先の燈をあらわす。第二番目は本身もしくは本命の燈を表す。第三番目は師父の燈を表す」という[松本 2010 : 9]。また張勁松らは、『藍山県瑶族伝統文化田野調査』の中で、「三つの灯明はそれぞれが師道公(祭司)の先師である、李十六、李十二、李十一を表す[張勁松ほか 2002 : 96]。」と述べている。代々の祭司を表す「祖師」と祭司の「先師」である李十六・李十二・李十一の李姓の神々とは、いずれも同じ祭司の師匠としての祖先を表す灯明であり、師匠たちの灯明を継ぐことは間違いないと考える。

### 1-2-2. 「取法名」

祭司は、三清(元始天尊・靈寶天尊・道德天尊)神画の前で三清神に対して、受礼者の生年月日を記した紅紙を持ち、受礼者の身分について説明する。そして、紅紙を牙簡に載せ、受礼者の法名を唱えながら、三清神画に近づける。もしも紅紙が自然に神画に貼り付けられれば、その受礼者の法名が三清神の承認を得たという意味を為す<sup>5</sup>。そして神画に紅紙をのりで貼付け、法名が決まる。法名を得ると「師男」と称され、祭司になったことを意味するという[張勁松ほか 2002 : 96]。同時に陰兵の加護を受けられ、自ら守る法術を身につけ、他人を救うことができ、死後の官職を獲得できるとされる[李祥紅 2010 : 25]。家を継承する資格も獲得することになり、法名を代々の祖先が連記される「家先牌」に加えられるのであるという[廣田 2011a : 335]

### 1-2-3. 「撥橋」「撥路」「撥兵」「撥将」「撥法」「分兵」「吹米」

「撥橋」「撥路」「撥兵」「撥将」「撥法」「分兵」「吹米」において、祭司は橋に変化した白布を用いて米を受礼者に渡し、兵が橋を渡って受礼者の元に行くことを現している。それから白布で米と36枚の錢を包み、受礼者に授ける。米は千万の兵馬を現し、錢は36人の強力な兵を現しているので、米と錢が授けられることは、兵を授けられることを意味している。さらに祭司は、受礼者の口を開かせ、米を牙簡に載せて受礼者の口中に吹き込み、法を伝授する。これらの儀礼を通じ、受礼者は橋と兵と法を伝授されるのである。

### 1-2-4. 「接香炉」

「接香炉」を通じ、祭司は「香炉(線香立て)」を家先壇から下ろし、受礼者の顔に近づけて匂いを嗅がさせる。これで祖先の「香炉」を継承する資格を得たことを意味をするという[廣田 2013 : 324]。

1-2-5. 「学打鑼」「学吹牛角」「学用卦」「学揺鈴」「学罡歩」

「学打鑼」「学吹牛角」「学用卦」「学揺鈴」「学罡歩」などの小儀礼を通じ、受礼者たちは、儀礼を行う際に使用される鑼や鈴の鳴らし方、牛角（角笛）の吹き方、卦（ポエ）の使い方、ステップの歩み方などを学習することができる。<sup>6</sup>

1-3. 「掛三灯」儀礼から見た授法と「行師」神画との関連

以上「掛三灯」儀礼中の授法と関わりがある小儀礼において受礼者はどのように授法されたのかを見てきた。各小儀礼を通じて伝授された法や能力などは、下表（「掛三灯儀礼を通じて伝授される法と能力の一覧」）で示す。表から、「掛三灯」儀礼を通じ、受礼者は、「三灯」を掛けられ、法名を得、橋と法を伝授され、36 名の兵を授けられ、鑼・牛角・鈴などの法具の使用法を伝授され、七星罡歩を伝授されることが分かる。また、「掛三灯」儀礼を経て「行師」神画を所持及び使用する資格を取得することができる。

何故「掛三灯」を経れば、「行師」神画を所持及び使用する資格を得られるのか。筆者は、二つの理由があると考ええる。

表 23 掛三灯儀礼を通じて伝授される法と能力一覧表

小儀礼名	伝授される法や能力	所持・使用できる神画
掛三灯	三つの灯明を掛ける/法名を得る	「行師」神画（4 点）  太尉神画 唐葛周三將軍神画 海播張趙二郎神画 総壇神画
撥橋・撥路・撥法・撥兵・ 分兵・吹米	橋が授けられ、法を伝授され、36 名の兵を授けられる	
接香炉	先祖の香炉を継承する資格を得る	
学打鑼	ドラの打ち方を伝授される	
学吹牛角	角笛の吹き方とト具の法を伝授される	
学用鈴	牙簡と鈴の使い方を伝授される	
学走罡歩	七星罡歩を伝授される	

一つ目は、掛三灯で灯す灯明の中に「祖師」を表す灯明を掛けられたからだと考ええる。上記したが、「掛三灯」儀礼には、三つの灯明の内に「祖師」を表す灯明を掛ける。「祖師」の代表として「李十六」・「李十二」・「李十一」という李姓の神々が見られる。「李十六」という神に関して、請聖書に収められている「李十六呪」<sup>7</sup> という記述に描写が見られ、「部兵猛将力威勇（部兵や猛将たちは威力があり勇敢である）」「五七將軍為大将（五七將軍は大将であり）」「統領三千六万兵（3 千と 6 万の兵士を統率する）」というような勇猛であり、兵将を統率する位が高い武官であることが分かる。筆者は、本論の第 5 章・第 2 節の「第 10 項 太尉に関する記述」では、請聖書に収められた「賞浪兵頭」「退下阜老賞浪」「接祖師」の三つの記述とも、「太尉南朝李十六（太尉である南朝の李十六）」という字句が見られるので、「太尉」と「李十六」は同一の神であると

考えると述べた。「太尉」は、中国古代官職の中で位が最も高い武官のことを指すため、「李十六」の武将とする官階を表すものだと考えられる。「掛三灯」儀礼には、受礼者は代々の祭司を表す「祖師」の灯明を掛けられた時から、李姓の神々を代表する「李十六」との関係を結ぶようになり、同時に「李十六」を使役する能力も伝授されたと考える。そのため「行師」神画中の「太尉」神画を所持及び使用することが可能になると考えられる。

二つ目は、「下壇兵馬」を授けられた為である。祭司の趙金付氏によれば、「掛三灯」儀礼で授けられる兵は「下壇兵馬」であるという。請聖書には「請下壇兵将」という記述が見られる。そこから「下壇兵馬」の将兵の名称が挙げられている。記述の内容は次のように示す。

「請下壇兵将」<sup>8</sup>

請下壇兵馬下壇将、下壇梅山白虎天門、李十五官、驢山法主九郎、梅山七郎、上元唐將軍、下元周將軍、中元葛將、雲頭仙女、明日龍鳳三娘、変現五通、両辺排馬郎君、金牙三十六尉、六遇初旬黄衣使者、白衣判官、走馬通天李十一官、感應上帝部兵、李十二官、三位旗頭官、左殿先鋒、右殿殺刀、同名八官、壇上五傷、壇下五傷、拿鬼捉鬼傷、犀牛皆上兵、猛虎毒蛇兵、旗麟獅子兵、春季春雷兵、下季下季兵、秋季秋雷兵、冬季冬雷兵、一年四季、五雷頭兵、五雷兵将、住宅土地、福神

<後略>

注目したいのは、記述の中に見られる「上元唐將軍」「下元周將軍」「中元葛將」「犀牛皆上兵」「猛虎毒蛇兵」「旗麟獅子兵」「住宅土地」という神々及び将兵の名称である。この中の「上元唐將軍」「下元周將軍」「中元葛將」の三神がまとめて描かれた「唐葛周三將軍」という神画があり、「行師」神画中の1点である。「犀牛皆上兵」「猛虎毒蛇兵」「旗麟獅子兵」「住宅土地」は、「総壇」という神画の最下部から、それぞれに刀を持って麒麟、獅子、虎、犀、象に乗る5人の男子として描かれた「犀牛皆上兵」「猛虎毒蛇兵」「旗麟獅子兵」と<sup>9</sup>、杖を持っている老者として描かれている「住宅土地」が見られる。「総壇」神画も「行師」神画中の1点である。ここから「下壇兵馬」に属する「上元唐將軍」「下元周將軍」「中元葛將」「猛虎毒蛇兵」「旗麟獅子兵」「住宅土地」などの神将は「行師」神画中の「唐葛周三將軍」「総壇」神画に描かれた神将と対応していることがはっきりと分かる。「行師」神画は「下壇兵馬」を絵で表現されたものと言えよう。

以上述べたように、「掛三灯」儀礼を通じ、受礼者は「三灯」を掛けられ「下壇兵馬」を授けられたので、「行師」神画を所持及び使用資格を得たと判明できる。「行師」神画を所有することは、「掛三灯」儀礼が済んだ証、「下壇兵馬」を授けられたことを意味している<sup>10</sup>。



第2項「度戒」儀礼における授法の状況について

廣田律子は、「構成要素から見るヤオ族の儀礼知識-湖南省永州市藍山県過山系ヤオ族の度戒儀礼・還家願儀礼を事例として-」の中で、「ヤオ族の男性は必ず宗教職能者となるイニシエーションを経なければならないとされ、宗教職能者としての法名を得てはじめて家を継承する資格つまり先祖の祭祀を行い死後祭祀を受ける資格を獲得することになり、法名は代々の先祖の法名が連記される家先単に加えられる（掛灯儀礼）。その上でさらに宗教職能者としての段階の最高位を獲得するために行われるのが度戒儀礼である。度戒儀礼以前に掛三灯の掛灯儀礼を経ているが、まだ実施していない場合は、度戒儀礼の中で補掛三灯儀礼が行われる。さらに十二灯を点す掛十二盞大羅明月灯儀礼が行われ最高の呪法の開天門が伝授され、幾つかの試練を受け、戒を授けられ、最終的に最高位を獲得する。」と述べている[廣田 2013a : 1-25]。以下、湖南省永州市藍山県匯源瑶族郷で行われる「度戒」儀礼を構成する儀礼名を示す。

- 1) 湖南省永州市藍山県匯源瑶族郷「度戒」儀礼[張勁松ほか 2002 : 131-254 ; 神奈川大学ヤオ族文化研究所『通訊第一号』2009 : 29-80]

立堂/落兵/封小斎/一次撥兵/封大斎/二次撥兵/串壇迎聖/請初夜聖/落禁壇/発功曹/上光・奏表/請中夜聖/昇刀/攀刀山/磨刀/上光/還四府願/上光/合星拌斗/補掛三灯/掛十二灯/開天門/上光・奏表/請末夜聖/回四府功曹/度水槽/上刀梯/拋老君印/度棘床/捧火石/奏迎兵表/游兵游将/籤名押字/昇老君職位/上光・賀詞/奏青詞/上光/招兵/分兵/開斎/合婚合火/吃合歡飯/宣布戒律/上光/奏謝聖黄表/奏謝罪黄表/上光/酬謝陰陽師父/点破宮門/撤壇送聖/開禁壇/拝師拝散/帶兵帰壇/送船

- 2) 2008年湖南省永州市藍山県匯源瑶族郷湘蘭村「度戒」儀礼[『神奈川大学歴民調査報告第12集・中国湖南省永州市藍山県ヤオ族儀礼文献に関する報告I』2011 : 3-35 ; 神奈川大学ヤオ族文化研究所ホームページ]

安壇/封小斎/落兵/喝落脚酒/封大斎/認三清/出排盞/上掛吊/上天橋/上陰橋/喝落脚酒/求師/勅鑼太鼓/拌五方昇鑼鼓/拌黄幡拌白幡/跑堂/請初夜聖/円満跑堂/上光(出排盞・求師)/開壇/初夜黄表開天門/補掛三灯/出排盞/請中夜聖/中夜道場黄表開天門/準備封刀山/謝師父/求師/昇刀/翻刀山(撥刀山)/dou 刀山/dou 刀山舞/謝師父/謝功曹/試刀梯/勅変刀梯/接刀/出排盞/上光/還四府願/上光賀星拌斗/出排盞/請末夜聖/掛十二盞大羅明月灯/開天門/度水槽(撥水槽)/供青詞/勅変符/出排盞/求師/勅変白鶴/求師/上刀山(撥刀梯)/出排盞/度勒床(撥勒床)/扶罡扶訣・捧火磚/遊郷(昇職位)/大戒文/老君飯/奏迎兵表開天門/回兵/招兵/謝師/添名押字/奏青詞/分兵/開斎/点破宮門/送孤神/拆榜文/謝師/勸破宮門/開禁壇/送香炉/送庫/求師/削斎表開天門/謝師/拆兵拆将/降香/収聖/合婚/合伙/拝師/帶新兵回家/各々の会首の家でやる儀礼(謝新度兵開天門・招五穀神開天門・安置兵)/送船